

志賀重昂における国粋主義の観念

——概念の両義性と論理の混乱——

荻 原 隆

序 論

志賀重昂の思想の全体像についてはすでに何度か取り上げてきたが⁽¹⁾、それらをもとに本稿は彼の国粋主義の観念についてあらためて再構成・論評したものである。志賀の国粋主義はかなり価値のある主張を含んでいるが、彼自身が概念性や論理性に弱いこと、また、本物の伝統主義者でなかったことが大きな原因となって、十分に展開しきれなかった。こういう点に注意しながら、彼の国粋主義を再構成してみる。

- (1) 拙稿「国粋主義の条件—志賀重昂の思想」(『名古屋学院大学研究年報』10, 1997年12月)、同「国粋主義の成立条件—志賀重昂と三宅雪嶺」(『名古屋学院大学研究年報』12, 1999年12月)、同「志賀重昂の国粋主義」(『名古屋学院大学研究年報』13, 2000年12月)、同「志賀重昂の保守主義—丸山真男の陸羯南論との関係で」(『名古屋学院大学研究年報』15, 2002年12月)、同「志賀重昂の思想—国粋主義以降」(『名古屋学院大学研究年報』16, 2003年12月)、同「三宅雪の国粋主義—志賀重昂と対比して」(『名古屋学院大学研究年報』17, 2004年12月)、同「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で(上)」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第四三巻第四号, 2007年3月)、同「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で(下)」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第四四巻第一号, 2007年7月)などを参照。

一 美としての伝統

志賀は『南洋時事』で一躍論壇の注目を浴びるようになったあと、政教社で国粋主義を唱える前に『国民之友』第一〇号に「如何ニシテ日本国ヲ(シテ)日本国タラシム可キヤ」(明治二〇年一〇月)という論文を寄せている。これは小論ではあるが、彼がのちに言う「国粋旨義」(国粋主義)—「国粋旨義」という言葉自体はまだ使っていないが—の主張をまとめた形で表明した最初のものであり、また、伝統をめぐる苦悩が正直に出ていて注目される。

まず、志賀はこの小論の冒頭で日本とはなにか、日本の固有のものとはなにかについて、それは美しい風土であると明確に答えている。

「弥望一色春海ノ如ク、満朶ノ桜樹ハ紅白濃淡相交リテ紛披シ恍トシテ際涯ナキ処、会マ花幔ノ欠タル間ヨリ芙蓉峰頭ヲ望ミ、千仞ノ岳上朝暾将ニ昇ラントシテ半天紅ヲ発シ、閃々爍々トシテ東海ノ波涛方サニ色ヲ変シ掩映依稀トシテ漸ク遠キニ接スルノ風色ヲ瞩望スレバ、黄塵堆

裡ニ奔走シ、黄金唯是レ崇拜スル無情冷淡ナル行商ト雖モ、猶且節ヲ停メテ躊躇シ、覺ヘズ「吁嗟美ナル風色ナル哉、百万ノ黄金ニモ換ヘ難シ」ト歎賞スルコトナラン、而シテ此花ハ日本固有ノモノナリ、此山ハ日本固有ノモノナリ、此水ハ日本固有ノモノナリト知了スレバ、誰レカ日本風土ノ優美ナルヲ嘆賞セザルモノアラシヤ、況ンヤ日本ノ土地ニ生レタル大和民族ヲヤ、所謂「敷島の大和心を人間はゞ、朝日に香ふ山桜かな」（中略）トハ偶然自然ニ発揮シタル感情ヲ直写シタルモノニ非ラズヤ、而シテ予ハ此感情ヲ利用シテ、隱約ノ間ニ日本ノ国基ヲ鞏固センコトヲ論ゼントスルモノナリ、」⁽¹⁾

桜の花と富士の峰を例に挙げて、この優美な風土こそ日本の固有のものである、風土への愛を国家の礎としたいと。桜花も富士も日本美の例としてははなはだ通俗的であるが、やがて国粹主義を唱えることになる当人が、少なくともこの小論では国体論や武士道に一切言及せず、山河の美を伝統の核心として明快に主張する点で陸羯南や多くの日本型保守主義者とはまったく違う。

けれども志賀はこの伝統に対し屈折した感情、むしろコンプレックスに近い気持ちを抱いており、言葉とは裏腹に真の愛着が持てないのである。その複雑な感情はこの小論に早くも現れてきている。日本のこれからの方向を論じた以下の部分がそうである。

「且所謂改良論者ハ固ヨリ愛國ノ思想ニ富ムヲ以テ日本社会ノ改良ニ熱心奔走スルモノトセバ、何故ニ諸子ハ「ミミクリー」（類形）ノ事業ニノミ熱心奔走シテ、純然タル勢力保存ノ事業ニ周旋彈力セザルヤ、日本ノ如キ貧弱國ニ於テ所謂今日直接ニシテ且急務ナル勢力保存トハ、是レ致富ノ方策ニシテ、所謂殖産興業是レナリ、然レドモ予ハ今日ハ勸農及ビ商業拡張ノ講論ヲ暫ク止メ、他ニ日本ノ国基ヲ鞏固スルノ方策ヲ論ゼントスルモノナリ、其者如何、曰ク日本ノ山水風土花鳥ノ優美ナルヲ嘆賞スルノ感情ヲ層一層涵養シ、コレヲ培植シ、以テ冥々ノ間ニ隱然ト日本國土ヲ愛慕スルノ觀念ヲ儲蓄セントセシムルモノナリ、」⁽²⁾

志賀は日本人の採るべき方向として三つの選択肢を提示している。

- (1) 外国品ばかりを崇拜する「ミミクリー」、つまり西洋の模倣
- (2) 富国ないし殖産興業
- (3) 日本国土への愛

彼が推奨するのは、もちろん(3)の「日本国土への愛」であり、(1)の「外国崇拜」は否定されるべきもの、(2)の「殖産興業」は強力に推進すべきであるが、とりあえずここでは議論しないでおくもの。

立論の趣旨から(3)の「日本国土への愛」を採るのは当然、(1)の「外国崇拜」を西洋かぶれと排斥するのも予想どおりだが、問題は(2)の「殖産興業」である。(2)について志賀は強い関心を示しながらここでの議論は打ち切っている。「殖産興業」と「日本ノ山水風土花鳥」的美意識がどうして簡単に一致しよう。近代文明の追求と伝統の保持がたやすくは相容れないことを認めざるを得なかった。こういう正直な認識は、近代文明と伝統の保持が矛盾しないかのように言い張る半年あとの『日本人』の議論よりはよほど好感が持てる。

しかし、それでもなおかつ、志賀は近代化に強い未練を残している。「国基ヲ鞏固」にする方法はないものかと言ひさして、産業振興の方策についての議論をやめたところに志賀の苦悩が良

く現れている。志賀の未練は(2)の「殖産興業」を「西洋化」とは言わずに、「勢力保存ノ事業」と書いているところにもよく出ている。「西洋崇拜」はダメであると断ったてまえ、「殖産興業」を「西洋化」などとは言えない。そこで「西洋化」ではなく「勢力保存」であるとしておけば、伝統主義の立場からも「殖産興業」を主張できる余地がいずれ出てくる。彼はこう計算したのであろう。しかし、産業立国は立派な近代化、本格的な西洋かぶれ以外のなんであろうか。

とはいえ、志賀が(2)についての議論をここでは打ち切ったことをやはり褒めてやるべきであろう。(2)の「殖産興業」を無条件に追求すると(3)の「日本国土(伝統)への愛」との整合性が決定的に破綻する。そういう破綻を無理にごまかそうとする論文は後でいくつも出てくる。矛盾に気がついて議論を打ち切ったところに、彼の苦悩がかえって正直に現れてしまったとも言える。

また、志賀が議論に行き詰ったのは伝統を日本の風土の美と定義したことにも起因する。美は本来、国家社会のあり方を示すものではない。美からただちに日本の進むべき方向を構想することはできない。日本の伝統が美であるとして、我々は一体どうすればよいのかわからないではないか。志賀は伝統、伝統と言いながら、内心、日本の伝統はこの程度のものなのか、もう少し何かないのかと忸怩たる思いに駆られたであろう。ただ、彼の議論はやがてやや深まりを見せ、美を調和・平和と解釈し、そこに歴史性や社会性を盛り込むことによって、この行き詰まりをある程度乗り越えようとするのである。

いずれにしても、彼はいったい伝統を復権したかったのか、それとも近代化を目指しているか。本心を抑えて、人間関係から国粋主義の陣営に投じたため、彼の論理は大きな混乱をきたすことになる。

注

(1)「如何ニシテ日本国ヲ(シテ)日本国タラシム可キヤ」、『国民之友』第一〇号(明治二〇年一〇月二一日)。

(2) 同。

二 国粋主義の思想——概念の両義性と論理の混乱——

(一) 政教社の成立

『南洋時事』で一躍有名になった志賀は、明治二一(一八八八)年、政教社の結成に加わり、主筆となった。半月間の雑誌『日本人』第一号の発刊は同年四月三日。政教社の人脈は二つある。ひとつは杉浦重剛と宮崎道正が設立に尽力した東京英語学校(後の日本学園中学・高等学校)関係者で、杉浦そして宮崎を中心に志賀重昂・今外三郎・松下丈吉・菊池熊太郎、もうひとつは井上円了を中心とする哲学館(のちの東洋大学)関係者で加賀秀一郎・島地黙雷・辰巳小次郎・三宅雪嶺・杉江輔人・棚橋一郎ら。ときあたかも、鹿鳴館の欧化主義華やかなりしころで、この風潮を憂える人たちが政教社に集結した。主義主張を同じくする陸羯南が国民主義に拠って新聞『日本』を始めるのが、翌同二二(一八八九)年。すでに、平民主義を唱えて徳富蘇峰率い

る民友社は同二〇（一八八七）年に雑誌『国民之友』を創刊しており、同二三（一八九〇）年には『国民新聞』を発刊することになる。

政教社に加わった志賀ではあるが、思想的に見ると、心からの伝統主義者ではなく、『日本人』グループとは相当の違いがある。たとえば、人脈の中心にいた杉浦重剛や井上円了らは本質的に国体主義者であると言ってよい。もちろん、他の文明的原理を排除しない、杉浦なら西洋の理学を、井上なら仏教を信奉・評価するところにいわゆる国体論と違う開明性や柔軟性があるが、しょせん国体論を中心にした採長補短主義者・折衷主義者である。立論のうちにさら明らかになるように、志賀の伝統観とはかなり違いがあるし、なによりも志賀は本質的に欧米崇拜者である。

にもかかわらず、彼は『日本人』の中心的同人だったわけであるが、それは彼が学んだ東京大学予備門や札幌農学校、そして南洋からの帰国後に勤務した東京英語学校の人脈の関係によるところが大きいであろう。政教社の後援者杉浦重剛はもと東京大学予備門長だったし（志賀はすでに札幌に旅立ってしまっていたが）、『南洋時事』の自題の「怨詞」に批文も寄せてくれた。宮崎道正は農学校時代の恩師で、杉浦とともに英語学校を設立・経営し、志賀をそこに推薦してくれた人である。政教社同人の菊池熊太郎と今外三郎は農学校のそれぞれ同級と一級下で、ともに東京英語学校の教師であった。

志賀は日本の伝統にそれほどの愛情を持っていたわけではないが、世話になった杉浦や宮崎、あるいは同窓生との人間的絆によって、多少心ならずも、政教社の仲間にはいったと考えられる。また、志賀が思想者としては緻密な論理や概念が苦手で、よく言えば豪放磊落な性格であったために、同人たちとのズレがそれほど気にならなかったのかも知れない。そして、彼は明治政府に対しても自由民権運動についても感謝と反感、評価と反発という複雑な感情を持っていた。官僚にもならず、そうかといって反政府にも回れない中間的な立場も国粋主義を選ぶ大きな原因になっているが、こういう人間関係や多少イデオロギー的立場からの旗幟の選択が本来の伝統主義者でない志賀の思考に概念と論理の狂いを生じさせることになる。

（二）国粋主義の思想——概念の両義性と論理の混乱——

伝統主義としての国粋主義 志賀は『日本人』第二号（明治二一年四月一八日）に掲載した「『日本人』が懐抱する処の旨義を告白す」の冒頭で「国粋主義（旨義）」とはなにかを次のように定義している。

「円錐形の鎮火山、秀然として海を抜き、屹立一万余仞、千年万年の冰雪、皚々として其峰嶺に堆積するものハ、実に富士の峰に非ずや、而して幾多の山系之を綿亘し翠を空に挿み碧を雲に横へ、遠く佇望すれば真個に一幅の活画の如く、転た人をして知らず識らず美術的の観念を發揮せしめ、而して漸くこれが發育を誘致したるものハ、蓋し偶然に非ざる可き耶、又一方より観れば、我日本の海島ハ温帯圈裡の中央に点綴し、其沿岸ハ均しく是れ温暖潮流の洗ふ処となり、天候和煦、風土潤沢なるを以て桜花此処に爛発し旭日と相映ずる処、一双の丹頂鶴が其間に翱翔するの状を倩視すれば、人をして自から優婉高尚なる観念を養成せしむる事ならん、而して又日本の海島を環繞せる天文、地文、風土、氣象、寒温、燥湿、地質、水陸の配置、山系、

河系、動物、植物、景色等の万般なる囲外物の感化と、化学的の反応と、千年万年の習慣、視聽、経歴とは、蓋し這裡に生息し這際に来往し這般を觀聞せる大和民族をして、冥々隱約の間に一種特殊なる国粋（Nationality）を翹成発達せしめたることならん、蓋し這般の所謂国粋なるものハ、日本国土に存在する万般なる囲外物の感化と、化学的の反応とに適應順從し、以て胚胎し生産し成長し発達したるものにして、且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し來り化醇し來り、終に当代に到るまで保存しけるものにしあれば、是れが發育成長を愈よ促致奨励し、以て大和民族が現在未來の間に進化改良するの標準となし基本となすハ、正しく是れ生物学の大原則に順適するものなり」⁽¹⁾

日本人がその独自の風土歴史の中で古來保持し続けた特質、とりわけ、美しい山河と温暖な氣候の中ではぐくまれた美意識が「国粋（Nationality）」である。これを未來にわたって繼承發展させていかなければならないと。伝統の維持發展が国粋主義であるという志賀の説明はとくにすぐれた洞察を含んだものではないが、国粋主義を定義する場合に必ず言わなければならない事柄で、我々が常識的に持っている国粋概念に合致し、了解できる。

もうひとつこのような定義の例を挙げておく。「日本国裡の理想的事大党」（『日本人』第五号、明治二年六月三日）にも「国粋」とは大和民族の伝統的美意識であると書いている。

「吁嗟予輩が所謂国名とハ此の優美なる日本邦土を目指す者なり、国家とハ日本国土と、兼て日本國民が勢力を總併するに最重最大最經濟的な彼の帝室を名称するものなり、国粋とハ大和民族が固有特立の精神と、其最長所たる美術的の観念を唱導するものなり、吁嗟此の国名、此の国家、此の国粋を衛護し之を保存するは、豈に夫れ予輩大和民族が至大至剛なる本分に非ずして何ぞや」⁽²⁾

志賀は当然皇室を尊重しているが、国粋主義の説明に際し、上記引用にも表れているように、国体の観念によってこれを埋め尽くすというようなことはしなかった。前掲の「『日本人』が懷抱する處の旨義を告白す」でも国体的な観念がある程度強く出てくるが、その場合でも水戸学者流から自分を自覺的に區別しており、天皇に対する絶対不變の忠義だけがわが国の精華であるというような言い方はしていない⁽³⁾。皇室制度を含めて、風土と民族の生活、とくに美意識が国粋の内容をなしていた。

勢力保存としての国粋主義 志賀はこのように美意識を中心として風土と民族生活のおりなす伝統の維持發展を国粋主義と説明しており、我々が常識的にイメージする国粋主義の概念もほぼこういうものであろう。ところが、彼が『日本人』に載せた国粋主義をめぐる諸論文を読んでもみると、別の国粋主義の概念が存在している。「日本前途の二大党派」（『日本人』第六号、明治二年六月一八日）での説明はこうである。

「日本旨義」とは何ぞや、^{コンサーヴェーション・オブ・エナジー}「勢力保存旨義」是れなり、勢力保存とハ何ぞや、自己が特有の勢力を歩々着々發揮進暢して、其基礎を鞏固にし、其重心線を垂直ならしめ、漸次の間に大勢力と化成するものを云ふ、然れば此の旨義ハ「欧州旨義」即ち模倣旨義と全然反對するものにして、日本國民が原性、本才、特能、精神、秀粋を養成蓄積し、淘汰改良し、以て日本国旗の命脈榮譽を永久万代の間に保維せんとするものなり」⁽⁴⁾

国粹主義（「日本旨義」）とは「勢力の保存」（コンサーヴェーション, ヲブ, エナジー）である、民族・国家の発展こそ国粹の発揮だと言うのである。「勢力保存」が「国粹主義」だと言いかねない気配は「如何ニシテ日本国ヲ（シテ）日本国タラシム可キヤ」にもあったが、前掲引用論文ではっきりと出てきた。この説明はまことに強引で問題がある。まず、国粹主義は伝統の維持発展であるという志賀のもともとの定義と大きく食い違い、もちろん、我々の常識的な概念からも完全に逸脱している。そして、そもそもこれでは国粹主義と近代化の区別が付かない。

民族国家が力を伸ばしていくことならば、国家の発展とか近代化とか富強化とか別の言葉を使うべきである（もし、「国粹主義」という言葉で志賀は対立する二つの観念を同時に表したのであると弁護する人がいるとすれば、それは強弁である）。そして、当然ながら勢力の保存・発展（民族や国家の発展）のためには、一般には伝統は邪魔で、西洋化するほうがよい。もっとも、伝統と言っても多種多様であるから、なかには近代化に比較的結びつきやすいものもあるだろう。たとえば、日本人は伝統的に器用であるが、これは工業立国に大きく貢献した。しかし、近代化に有利な伝統というのはむしろ例外であって、多くの場合、伝統の保持と国家の発展が即座に結び付くはずがない。たいていの近代化とは伝統に挑戦し破壊することである。ところが、志賀は伝統の保持も国家の発展も国粹主義であるというような実におかしな説明をしてしまったために、伝統と近代がまことに強引に結び付けられている。『『日本人』が懐抱する旨義を告白す』から引用する。「後者（国粹主義——筆者）ハ日本を日本とし、而して後西洋学問の長所を以て其短所を補ハんとする者なり」⁽⁵⁾

「且つ夫れ「日本分子打破」論者の所説を数理学上に徴すれば、日本の開化ハ後進なるを以て仮りに1234となせば西洋の開化は12345678910なり、故に日本国裡に西洋の開化即ち10を輸入せよと奨励するに過ぎず、焉んぞ知らん日本在来の分子を打破して0となし、而して遽然10の開化を輸入せば、0より10に飛越跳躍する者にして即ち其間に太だ空隙を生じ、為めに根柢基礎ハ偏に脆弱にして間擧倒するの恐れ無とせず、寧ろ1234を漸次に増進し来り、5678910となすの安全鞏固なるに若かざるなり」⁽⁶⁾

「只泰西の開化を輸入し来るも、日本国粹なる胃官を以て之を咀嚼し之を消化し、日本なる身体に同化せしめんとする者也」⁽⁷⁾

日本的に咀嚼することによって文明化がうまくいく、日本の伝統の上に西洋化を図れという議論である。しかし、これでは「国粹主義」ではなく、「採長補短」や「接木」である。

しかも、志賀の言っているようにいつもいくはずがない。日本の伝統を近代化の中にうまく生かせる場合があったとしても、それはむしろ少数例である。（もし、あるというのなら、ぜひ示すべきである。日本の伝統を通して本当に近代化できるのか、どうすれば可能なのかをかならず語らなければならない。ところが、志賀はそれ以上なんの説明もしてくれないではないか。）だいいち、文明開化の時代にあえて日本主義、国粹主義を唱えるということは、本当は近代化を相当犠牲にして、あるいは修正してでも伝統を守れという主張でなければならない。そういう覚悟こそ国粹主義であろう。ところが、志賀はこういう伝統と近代の相克というきわめて重要な問題をつきつめて考えてみようと思わず、じつに簡単に国粹主義と近代化を結び付けてしまった。当時

の読者からも、これでは国粋主義と文明化の区別がつかないではないかという批判が寄せられている⁽⁸⁾。たしかにこれでは日本的開化と西洋的開化はたんなる発展段階の違いでしかなくなっている。鹿鳴館に象徴される政府の西洋化も志賀が批判するように浅薄であったろうが、彼自身の伝統と近代の結合の仕方もまことに安易である。

この類の強引な論法をもうひとつ挙げておく。

「予輩ハ「国粋保存」の至理至義なるを確信す、故に平等旨義を懐抱する者なり、故に調和旨義を懐抱する者なり、故に改革主義を懐抱する者なり

論じ去り論じ来りて此处に到れば、予輩は偏に「国粋保存」の経済利益的なるを確知する者なり、既に経済利益的なれば、即ち這般ハ実には宇内大勢の正流に順適する者なるを徴証すべし、然り而して彼の「塗抹旨義」と「日本分子打破旨義」とは経済利益的本源本流に非らざるを以て、日本最大数の民人が最大幸福ハ実には這般の両旨義より湧出する者に非ざるや夫れ明か也、」⁽⁹⁾

「国粋保存」が平等主義で、調和主義と言うのも飛躍があって分かりにくい、改革主義で、経済的利益に合致し、世界の大勢であると言うに至っては、安易粗雑を通り越してもはや支離滅裂である。どうして伝統の擁護がただちに改革主義や経済的利益になるのか。どうして世界の大勢なのか。思想者としてまことに無責任で没論理的な発言である。

もとより、いかに伝統の保持を叫ぼうと、日本の近代化は絶対に必要であった。伝統主義者としても近代文明に関心が行くのは当然である。近代化の中に伝統を、伝統の中に近代化をどう位置づけるかという難問に誠実に答えるのがそもそも国粋主義者であろう。ところが、志賀は西洋文明の受容にあたって、日本の伝統を生かし、日本的に咀嚼しなければならないと言うだけで、なにを生かし、どう咀嚼するのかについてよく考えていないし、手がかりさえ与えてくれないではないか。こういう困難であろうとももっとも重要な作業ができないから、日本の伝統になんともなく西洋文明を接木すればよい、また、できるというような言い方で問題をごまかしたのである。

他国の国粋 このような概念の混乱を他国の国粋を論ずる場合にも持ち込んでいる例を挙げておきたい。「豪洲列国の合縦独立せんとする（の）一大傾向」（『日本人』第二号、明治二二年二月三日）がそれである。同論文は明治二二年一〇月の第三版以降の『南洋時事』に第八章「豪洲列国ノ合縦独立セントスル一大傾向」としても収録されている。志賀はオーストラリアの独立問題に関連させて、「国粋」の重要性を以下に論じている。この論文あたりがともかくも「国粋主義」を論ずる最後のものである。ちなみにオーストラリア連邦の正式宣言は一九〇一年、正式独立は一九三一年である。

「豪洲殖民の実力既に斯くの如し。これを一人に譬ふるに猶ほ少壮の漸く自己の見識を立て、知らず識らず特立特行の観念を開発するものに似たり。豪洲の殖民実力を蓄積して自から一見識を立て、之れと共に所在万般なる困外物は彼等の間に漸く一種特殊なる国粋を発達せしめ、此の国粋愈々発達して本国の事物と愈々相隔離し、本国の利害と愈々相衝突す。此の国粋や一起して“Australia for the Australians”（「濠太利ハ濠太利人の濠太利たらざるべからず」と云ふ義なり）の喊声となり、再起して“National Party”（独立党）の団結となり、三起して豪洲列国の合縦独立となる、」⁽¹⁰⁾

「彼れと云ひ此れと云ひ亦以て独立旨義の気焰を徴知すべし。然り而して其起因する処実に濠洲植民が有形上の実力を蓄積したると、無形上一種特殊なる国粹を発達したる二大元素に在り。真個に国粹の発達ハ民族独立の觀念が発達と兩々相并行するの證左となすに足れり。(中略) 進化の神は汝輩を^{ママ}呵護せり。」⁽¹⁾

ここでも、志賀の国粹概念の欠陥が是正されずに、そのまま露呈している。引用部の「国粹」・「特立」とは、国家民族の成長発展と、その結果としての独立・自己權益の要求であって、伝統の保持とはとくに関係がない。だいいち、オーストラリアの独立は(この論よりあとのことだが)、いわばアメリカの独立と同じで、国家民族の発展から出てくる主体性の主張であり、その意味での政治的ナショナリズムの問題ではあるが、両国が独立に関連してとくに復古を強調したという話も聞かない。もともとオーストラリアやアメリカは伝統を云々するには歴史が浅すぎる。したがって、伝統の保持という意味での「国粹」を考える際に、オーストラリアの独立問題を例に出すのははなはだ不適切なのである。ところが、国家としての自覚発展も国粹主義であるということにしてしまったから、引用のようなおかしい議論をしてしまうのである。

このように志賀の国粹主義は伝統の維持発展と国家の強盛の両義性を持っていた。国家の強盛を目指すとするれば、近代化は避けて通れず、その方向は本質的に伝統と衝突する。このふたつはとうてい簡単には並立はできない。にもかかわらず、彼は両者を強引に等置し、ごまかしてしまうという重大な欠陥があった。それはまた伝統と近代の相克から目をそらし、結局は伝統が捨て去られて終わるという結果を招くことになる。

こういうことになったのは、志賀の論理性の粗さに加え、国粹主義の下に欧米主義の本音が隠されているからである。したがって、国粹主義は伝統主義であるというしごくもっともな説明をしておきながら、いっぽうで、国粹主義は勢力の保存発展(結局欧米化)と同じであるというような奇怪な説明になってしまったのである。

注

- (1) 『『日本人』が懷抱する処の旨義を告白す』、『日本人』第二号(明治二年四月一八日)。
- (2) 「日本国裡の理想的事大党」、『日本人』第五号(明治二年六月三日)。
- (3) 『『日本人』が懷抱する処の旨義を告白す』、『日本人』第二号(明治二年四月一八日)。
- (4) 「日本前途の二大党派」、『日本人』第六号(明治二年六月一八日)。
- (5) 『『日本人』が懷抱する処の旨義を告白す』、『日本人』第二号(明治二年四月一八日)。
- (6) 同。
- (7) 同。
- (8) 藤原秋義「国粹論を駁す(其一・其二)」、『東京經濟雑誌』第四一九～二〇号(明治二年五月一九、二六日)。これは高野静子『蘇峰とその時代—よせられた書簡から—』(1994年、中央公論社)、一七七頁に紹介されている。なお、志賀の反論と思われる「感涙を滴れたるもの」(無署名)が『日本人』第六号(明治二年六月一八日)に載っているが、論理的ではない。
- (9) 「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に撰定せざるべからず」、『日本人』第三号(明治二年五月三日)。

(10)「豪洲列国の合縦独立せんとする（の）一大傾向」、『日本人』第二号（明治二二年二月三日）。

(11) 同。

三 美の社会的生活——その過去と未来——

ところで、志賀はいったい伝統（美）からどのような国家社会像を導き出そうとするのか。彼の強引な論法のために、ほんらい徹底的に考えておかねばならないこのもっとも重要な点がほとんど浮かび上がってこない。美意識のような芸術的観念はそもそも政治社会論になりにくいという意見もある⁽¹⁾。しかし、この点で手がかりになる論文がわずかだが存在する。美意識は過去にどのような生活となり、未来にどのような社会を描こうとするのか。

（一）美の社会的生活——その過去——

志賀は『日本人』第七号（明治二一年七月三日）に「大和民族の潜勢力」という論を載せている。これもさして長くはない。また、例によって論理が粗いという彼の弱点も顕著である。しかし、日本の美の特質は何か、そこから出てくる日本人の生活とはどのようなものか、ようするに日本人の本質とは何か、というテーマにともかくも正面から挑んだものである。同時代の国粋主義者たちは一体に伝統の保持を叫ぶわりに、伝統の本質とはなにかについてまったく定義も説明もしなかったり、曖昧な説明で済ませる人が多い。『日本人』における国粋主義の概念そのものをめぐるきわめて重要な議論は低調に終わってしまったが、これは国粋主義者たちが日本の伝統を国体であり、分かりきったものと考えていることや、伝統に案外自信を持てないことが大きな原因ではないかと思われる。その意味で正面から日本人の生活の本質を問おうとした志賀の「大和民族の潜勢力」は注目に値する。そして、論理の強引さや説明不足に目をつぶると、言わんとするところは日本人の精神生活の核心をよくとらえている。その中心部分はこうである。

「夫れ西洋の開化ハ数理学より由来す、数理学の源流ハ分析なり、故に西洋の長処たる科学は皆分析法に因らざるものなし、化学、理学、生物学、星学、地学の如き即ち是れなり、然り而して這般分析的の感化ハ泰西社会の事々物々に浸入せざるなく、其極処に至れば陰険となり、自愛となり、射利となり、拝金となり、終に倫理道德の壊敗を速くや夫れ明けし

日本の開化ハは泰西の開化と対角線的に相反せるものにして、其源流ハ調和より由来す、調和ハ即ち美術の本源なり、美術とハ分析したる事々物々を集合点綴し、能く協協調和したるものゝ謂にして、仮令ば一人士の面貌を分析して眉目も美なり、鼻口も美なり、耳も腮も悉く是れ美なりとて、其人の容姿必ずしも優美なりと云ふべからず、亦以て美なる観念ハ分析したる事々物々を協協調和して、而して後発起するものなるを徴知するに足れり、既に然り大和民族の美処、長処、粹処ハ美術的の観念に在り、故に紫式部の小説となり、狩野流の絵画となり、陶器製造となり、漆塗となり、刺身と云ひ、口取りと云ひ、事々物々皆是れ美術的の空氣を包含せざるものなし、然れども其極端に到れば、淫猥なる和歌となり、逸樂なる氣象となり、或ハ茶の湯に沈溺し、挿花に拘執し、保守となり、放浪となり、怠惰となり、睡眠となるの傾向

なきにしもあらざるなり

予輩ハ、敢て告白す、所謂日本の国粹ハ、美術的の觀念に存在すと、然れども這般の觀念は藤原氏執権の当代に軟弱となり、戦国の時期に退歩し、徳川氏の治世三百年の間に變則的の發達を作為したるものなり、然らば大和民族の氣風が保守なり、放浪となり、怠惰となり、睡眠と化成したるハ、これ美術的の觀念が一時邪路に行歩したるのみ、正道より隔離したるものゝみ、何んぞ這般を正則的に發達せしむるの希望なしとせんや、」⁽²⁾

志賀は調和こそ美の本質であり、日本の伝統の核心であると言う。美の本質が調和にあるかどうかはかなりむずかしい問題であって、すぐれた芸術作品はこれまでの調和や通念を破りつつ、より高い新たな調和を作り出していくところにその真髓があるとも思える。したがって、調和だけが美の本質とは言えない。しかし、日本の風土はおだやかに調和した相貌を持ち、破天荒な景觀が少なく、また、我が国民はとかく小さくまとまって繊細なものを愛玩する傾向があるから、日本人の美意識・精神の特徴としてはかなり妥当である。志賀によればこの美こそ日本の伝統の核心にあり、それは社会生活としては調和である。協調的でやさしいところが古来日本人の決定的特徴である。そのかわり、どうしても安逸平穩に流れる。つまり、意志や勇氣や主体性に乏しいのである。

この伝統解釈は日本人の長所特徴と、あたりまえのことだがそれと表裏一体の欠陥弱点をなかなかみごとにとらえている。彼は国体や武士道を畏敬しながら、しかし、ここでは多少予想とは違っていっさい持ち出していないのもよい。日本人のおだやかな気質は国体思想や武士道を時間的にも階層的にもはるかに超えた長く広い伝統だからである。

細かく見ると、志賀がこの日本人の特徴が良かれ悪しかれもっともよく發揮されたのは平安時代と江戸時代だと言っているのも正確である。平安の前期と江戸時代は平和が続いた。戦国時代には退歩したと言うのも納得できる。合戦が常態化している時に、武士がおだやかでは仕事にならないからである。

また、「漆塗」・「刺身」・「口取り」・「和歌」・「茶の湯」・「插花」のような例のあげ方を見ると、志賀は日本の文化はとかく小器用で、悪く言うとうち小であるという評価を下しているようである。たしかに、日本人はものづくりがその典型で細部にこだわり、繊細でいいのである。そのかわり、大きな構想力に弱い。志賀は明示的に言っていないが、そういう例としてあげているとすれば、これも的確である。

しかし、日本人論としては本質を突いた志賀の論にいくつかの不満が残る。まず、短いということである。志賀の国粹主義についての論文は常に短い。せっかく国粹主義者が日本の伝統の核心に迫ろうとするのだから、もう少したんなる考察がぜひとも必要なところである。たとえば、日本人が調和的だとすればそれはなぜなのか、どこから来ているのかという考察がない。志賀のこれまでの考え方から言えば、日本の風土がその主要な原因として挙げられてよいはずであるが、風土性への言及はない。また、民族の興亡がなく、単一民族で成り立っているという日本人独特の歴史と精神性との関係にも思考を及ぼすべきなのであるが、そういう原因分析もない。日本の伝統の由来起源についての考察があればこの小論の深さや厚みも増したであろうが、本来の伝統

主義者でないという弱さがこの小論を小論のままにとどめてしまった。

また、論理も粗い。たとえば引用部で、西洋文明の基礎は数理学の分析的な手法にあると言っているのはいちおう理解できるが、その数理的手法が利己主義になり、拝金主義になり、風俗道徳の退廃を招くと言うに至っては理解不能である。数理的手法がなぜ拝金主義になるのかその仕組み・プロセスのようなものはまったく説明されていない。このような論理的・概念的思考の弱さはとくにこの小論の最後に顕著で、例によって伝統と近代を矛盾しないかのように強引に接続する論理の飛躍というよりごまかしをやっている。それは次のような個所である。

「然ども予輩は敢て泰西の開化を輸入すべからずと論説するものに非らず、寧ろ鋭意挺進してこれを日本国裡に利導し、以て日本国粹を正則的に発達せしめ、其根柢をして愈々鞏固たらしめんとするものなり」⁽³⁾

「今や大和民族が特性中の美処、長処、粹処を縷説し、這般を保存し且発達せしむるハ日本国旗の命脈を当代の優勝劣敗場裡に保維する最大計最長策なるを説論して、此処に国粹論の筆陣を納めんとするものなり」⁽⁴⁾

後者の引用について言うと、伝統を保持することがどうしてただちに生存競争に有利に働くであろうか。もとより、伝統といえども多種多様であるから、なかにはそういったものもあるかもしれない。しかし、民族の生き残りを賭けるなら全体としては近代化するしかない。そう思って、日本は開国開化を選んだのである。逆に、伝統の保持は一般的には生存競争に不利なのは明らかである。というよりも、あえてこの時代に国粹を唱えたのは生存競争的な近代化とは違う国家社会の方向を模索するためではなかったのか。伝統の維持が生存競争での勝利に簡単に結びつくわけがない。それを優勝劣敗にも有利だなどと言うのは、いつものことながら、志賀の致命的なごまかしである。

そして、最後に、志賀が日本の伝統にそれほどの愛着を持っていないことがこの論文からも感じ取れることを指摘しておきたい。国粹主義者たる者、無批判に伝統を肯定してはならないが、嫌悪・批判するだけでなく、同時に深い愛情を持っていなければならない。少なくとも批判と愛情の両者がなければ国粹主義者たる資格がない。ところが、この論文は伝統の評価すべきところを取り出そうとする趣旨で書かれているはずなのに、全体的な印象としては愛着よりも嫌悪の感情が強いように見える。だからこそ、結論の部分で伝統に近代を強引に接木するような論法が平気で出てくるのでもあり、これでは伝統を心から愛し真に活かすことは不可能である。

新聞『みかは』の論説の場合 日本人のおだやかで調和の取れた社会生活に対する志賀の高い評価を新聞『みかは』の論説からも補強したい。彼は『南洋時事』の著者として、また『日本人』の同人として論壇に認められたすぐあと、いわば故郷に錦をかざる形で、岡崎の地方紙『みかは』の支援を依頼され、明治二二年一〇月から一年間、在京のままでその主筆の役割を引き受けた⁽⁵⁾。同紙は新聞とはいっても日刊ではなく、半月刊紙でしかないが、志賀の協力が始まると紙面が改良され、月三回の発行となった。『みかは』（第七号、明治二二年九月一日）は一〇月からの志賀の協力と紙面刷新を大きく宣伝し、一〇月一日の第九号に「三河男児歌」を含む論説を第一面に掲載した。これは無署名であり、三節に区分されているが、一節目のこの歌は志賀の作と

してよく知られており、二節目がその書き下しでなおかつ全体が相互に関連しているから、第三節も彼が書いたものと見て間違いのないであろう。

この第三節で志賀は世界に誇るべき日本人および三河人の事業についてこう説明している。

「敢テ問フ日本人種ハ世界ノ歴史上ニ何等ノ成跡ヲ遺シタルカ。日本人種ハ世界唯一無二ノ事業ヲ成就シタルコトアルカ。曰ク在リ。四箇ノ唯一無二ナル事業ヲ成就シタリ

第一 鯨族ヲ漁獵スル戟戈ヲ世界ノ各人種ニ先チ初メテ製造シタルコト

第二 三百年ノ長歲月間泰平昭世（二三ノ小一揆ヲ除ク）ヲ成就セシコト

第三 二百年間ニ百五十万ノ人口ヲ保有セシ大都ヲ（江戸）創設セシコト

第四 全世界ニテ最モ金銀ヲ縷メタル建築物（日光廟）ヲ造り出セシコト

然リ而シテ鯨族ヲ漁獵スル戟戈ヲ初メテ製造シタル者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ。

三百年間ノ泰平昭世ヲ成就セシ者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ。二百年間ニ百五十万ノ人口ヲ保有セシ大都ヲ創設セシ者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ。全世界ニテ最モ金銀ヲ縷メタル建築物中ニ廟祀セラルル者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ」⁽⁶⁾

志賀によれば、（一）捕鯨用のモリの類の開発、（二）江戸時代の平和、（三）百五十万都市江戸の創設、（四）日光廟、この四つが三河人、日本人の世界に誇る事業である。国粹主義者が万世一系の国体を挙げなかったのは、さすがに彼のふるさと三河という土地柄を考えたからかもしれない。第一の捕鯨用モリの開発や第四の日光廟はどうかと思うが、第二の三百年に近い平和と、それに密接にかかわる第三の百万都市江戸の創設は、三河人のお国自慢の要素が出ているとしても妥当であろう。これは志賀の言うように世界史的に見ても日本人が誇ってよいことと思われる。武士道だの国体思想だのと言うよりもはるかに普遍的価値がある。三河人ならぜひとも武士道を出したいところを、志賀は日本人の世界に特筆すべき伝統としてその平和性をあげたのである。

（二）美の社会的生活——その未来——

そして、国粹主義はいかなる未来を、国家社会構想を持つのであろうか。志賀は当然鹿鳴館の舞踏会に象徴されるような安手の欧化主義が不満で、東京や都会が繁栄し、地方が困窮している状況を憂慮し、一般の国民の幸福や繁栄こそ国粹主義にかなう、しばしばそういう口ぶりをもらしている⁽⁷⁾。しかし、そのために提唱されたのは殖産興業であり、海外への進出であり、貿易や移民であった。こういう方法によって国民の生活を豊かに幸福にすることはむろん可能であるとしても、それは西洋の模倣・近代化そのものであって、国粹主義ではない。それでは伝統から未来を切り開いた事にはならない。伝統から未来を考えるとといったいどういう社会が出てくるのか、この点について志賀はほとんど答えてくれていないが、『日本人』創刊号（明治二一年四月三日）掲載の「『日本人』の上途を餞す」にその手がかりが多少ある。これは時間的には先述の「大和民族の潜勢力」（『日本人』第七号、明治二一年七月三日）よりも少し前である。この「『日本人』の上途を餞す」は次のような宣言をしている。

「唯冀クハ彼の「カツラ」の根、蕨の餅、一歳一回鎮守祭礼の節、麦粥を吸るを以て人生第一の快樂となし、日夕催租の胥吏が柴門を敲く毎に轍ち心を乱し膽を落し、或ハ被衣を典して之が

督責に充て、母ハ病床に臥して兄ハ飢寒に叫び、経営惨澹、意匠凄疎たること猶ほ

“Give me three grains of corn, mother,
Only three grains of corn;
It will keep the little life I have,
Till the coming of the morn,
I am dying of hunger and cold, mother,
Dying of hunger and cold,
And half the agony of such a death
My lips have never told.”
“The king has lands and gold, mother,
The king has lands and gold,
While you are forced to your empty breast
A skeleton babe to hold, —
A babe that is dying of want, mother,
As I am dying now,
With a ghastly look in its sunken eye,
And famine upon its brow. ”

— Miss Edwards.

の如き、多数民人をして責ては六日の勤勉一日の休憩を獲せしめ、恰も好し此夕村落の春雨、霏々として糸の如く檐を繞るの点滴、声琴筑に似たる裡、眉雪の父老が鑿鑿鏡を把り一葉の新聞紙を展べ来り、家族の児孫を炉辺に集め之を講読しける後、共に携えて晚餐の食卓に就き、翁媼、夫婦、児孫団欒として相擁し、満盤の菰蔬雨を帯びて翠色滴んとする処、且一碟の鶏肉を賞味し罷んで、座ろに飽き来れば、被髪紅頬花の如き八才の小孫ハ翁媼の奨励に従順して輒ち起立し、可愛の音曲もて一曲の「君が代」を朗唱すれば満室の喝采涌くが如く、為めに采畦竹籬の鴿鳩をして驚起せしむてふ計りしきの清福快樂と、智力利便とを博取せしめんと欲する者なり」⁽⁸⁾

英詩を含む引用部の前半は現状を告発したもの、後半は目指すべき理想境という構成になっている。一般国民の悲惨な生活を告発しているのと、英詩（Miss Edwardsという作者、詩人らしき女性についてはよくわからないが）を原語のまま引用しているのを見ると、『日本人』に一年ほど先立って世に出た『国民之友』創刊号を飾った徳富蘇峰の「嗟呼国民之友生れたり」（『国民之友』第一号、明治二〇年二月一五日）を明らかに強く意識した書き方である。

蘇峰はこの記念すべき論説の中で「我か普通の人民は寂寥たる孤村、茅屋の裡、破窓の下、紙燈影薄く、炉火炭冷に、二三の父老相對して濁酒を傾るに過ぎす、」⁽⁹⁾と、文明開化の恩恵にあずかれなかった一般の国民の貧しくわびしい生活を描き出して、明治政府を批判し、また、終わりの方でミルトンの『失樂園』の一節を原語のまま抜き出して、日本の混沌たる状況にたとえた。

志賀は蘇峰のやり方をどうやら真似たようである。Miss Edwardsの詩は飢えと寒さで死のう

とする者が、母よ、せめてトウモロコシ三粒を、それで翌朝まで露命をつなごうと願うきわめて悲惨な光景を詠ったものである。人々の胸に強く訴える、いささか扇動的な情景を用意し、またハイカラに英詩を原語で引用してみせるというやり方は蘇峰を意識したものであろう。ともあれ、前半は扇情的ではあるが、比較的ありきたりな現状批判で、とくに新鮮味はない。

しかし、未来図にあたる引用部の後半は志賀の独自性が出ていてなかなか面白い。志賀が理想として描いたものは、多くの日本人が心の原風景として常に帰っていくところである。それは、まことにおだやかで、暖かく、つつまじやかな家族であり、のどかで美しい村落の風景である。くわえて、中国の家族関係が親に対する子の孝を厳しく要求するのに対し、日本の場合は親が子をいつくしむことを大変麗しいものとし、それを道徳的義務にまで高めていったと言われるが、その意味でも祖父母や親の子（孫）に対する慈愛が溢れる家族の描写はいかにも日本的である。

こういうささやかで、しかし、平和であたたかい、親子の情が溢れる生活こそ日本人の伝統であることを、もし志賀が鋭く自覚したうえで、この人々の生活を明治政府の近代化に対しあくまでも守ろうとしたのであれば、彼はみごとに伝統を未来に投影することに成功したと言える。こういうおだやかなつつましい生活の擁護からは、平和とか調和とかある種の平等とか弱者の保護というような国家社会的原理が比較的無理なく導き出せるであろう。それは、軍備を増強し、弱者を犠牲とするような明治政府の近代化に対抗する立派な社会国家の構想に育て上げることができる。また、強引な文明化や都市化に対し、農村の保護、あるいは都市と農村の調和の取れた発展という主張にも展開できる。身の丈に合わない近代化はするな、国民の生活に配慮せよという国粋主義者の主張が日本人の伝統的生活を踏まえつつ新しい国家社会の理念として胎動しているではないか。志賀はこういう形で伝統を新しい社会の中に生かし、明治政府の近代化とはちがった国家の未来を構想してみればよかったのである。

ただ、問題はおだやかでつつましく慈愛に満ちた村落の生活を守れという主張が、たんなる未来図ではなく、まさしく伝統（調和）を未来に投影した形になっていることを志賀がどれほど深く自覚していたかである。この点に強い疑問が残る。日本の伝統を意識はしていたであろうが、それを生かそうという鋭い自覚のもとに書かれたようには読めない。国粋主義者は、たんなる未来図ではなく、伝統を未来に生かす試みを深く意識して書かなければならない。それでこそ国粋主義者である。しかし、残念ながらそう明快には読めないのである。むしろ、たまたまこういう主張が生まれただけという気配が濃い。だからこそ、せっかくの未来図もふたたび取り上げられることはなかった。もし、志賀が本物の伝統主義者であったならば、この構想を簡単に放棄することはなかったであろう。伝統を未来に活かすこの試みを繰り返し繰り返し提案し、深化させていったはずである。

結局、志賀はこれ以降、伝統と未来を結びつける作業をつきつめて考えることがなかった。それは彼が日本と日本人のためにさまざまな提案や構想をしなかったという意味ではまったくない。彼は終生、日本の将来のためにじつに精力的に行動し発言している。ただ、未来についてのさまざまな提案がどう伝統と結びつくのか、どう伝統を生かしたら豊かな未来が構想できるのかという観点から考えているようには見えないということである。これは、結局のところ、伝統へ

の愛着が案外浅く、したがって、伝統を生かすことにこだわりを持っていないからである。それは西洋文明への批判が弱く、つい西洋を羨望してしまうことと裏腹でもある。志賀はついに国粋主義者・伝統主義者になりきれなかったのである。

志賀は『南洋時事』の中で日本人は冒険心が弱いと歎いている⁽¹⁰⁾。これは日本人がおだやかで平和性があるということを、逆から表したものと見ることができる。つまり、よく言えば、調和やさしさを好む者は、どうしても大胆さに欠け、冒険心にも乏しいうらみがある。しかし、日本人は冒険心が乏しいと言って終わってしまっては国粋主義者にはなれない。冒険心は乏しいが、おだやかである、平和性がある、それを未来に生かそうと考えるところに国粋主義の可能性が出てくるのである。そこではじめて、伝統と未来を結びつける端緒が見えてくる。志賀にはその端緒があるが、展開しきれていない。

注

- (1) 植手通有『『国民之友』・『日本人』』、松本三之介編『政教社文学集（明治文学全集 37）』（1989年、筑摩書房）、四〇九頁。
- (2) 「大和民族の潜勢力」、『日本人』第七号（明治二十一年七月三日）
- (3) 同。
- (4) 同。
- (5) 志賀重昂「三河新聞紙上ニ於ケル予」、『みかは』第九号（明治二十二年一〇月一日）。『みかは』新聞については、長坂一昭「重昂と『みかは新聞』——志賀重昂の人と思想を求めて（Ⅱ）——」、『東海愛知新聞』（1981年10月28日）、宇井邦夫『志賀重昂 人と足跡』（1991年、現代フォレスト）、三七～九頁参照。
- (6) 「無署名（志賀重昂と推定）論説」、『みかは』第九号（明治二十二年一〇月一日）。
- (7) 「日本前途の国是は「国粋保存主義」に撰定せざるべからず」、『日本人』第三号（明治二十一年五月三日）、「新内閣総理大臣に所望す」（明治二十一年五月三日）、『全集』第一巻、九一一〇頁など参照。後者は『全集』では『日本人』第三号（明治二十一年五月三日）所載となっているが、同号には見当たらず、出典は不明である。
- (8) 「『日本人』の上途を餞す」、第一次『日本人』第一号（明治二十一年四月三日）。
- (9) 徳富蘇峰「嗟呼国民之友生まれたり」、『国民之友』第一号（明治二十〇年二月一五日）。
- (10) 『南洋時事』（初版）、七五～六、一九〇～一頁。

結 論——保守主義における伝統理解の欠如と論理性の不在——

志賀の国粋主義の観念を見てきたが、その主張はかなりすぐれた内容を持ち、そして、伝統を未来に活かそうとする試みにもまことに興味深い部分がある。これらの点で彼は他に抜きん出た保守主義者であったと言ってよい。しかし、彼は概念性・論理性が弱く、また、いかにもたまたま伝統主義者になっただけというところがあるため、その国粋主義は途中で放棄されてしまった。伝統を的確に理解し（この点では志賀はまじであるが）、それを論理的に表現する思想者の不在が、日本の伝統主義をまことに貧しいものにしてしまったのである。